

植物

《タンポポ類》

葉はすべて根元から出る。茎や葉を切ると白い乳液が出る。舌状花が集まった頭花が春に茎の先に1個つく。舌状花からできる果実(そう果)にはパラシュート状の冠毛があり風によってよく飛ぶ。日当りのよい所に生え、林の下には見られない。全国に分布する。

タンポポ類は在来タンポポと外来タンポポ(帰化植物)に分かれる。この調査では在来タンポポは種類が多いので区別しないが外来タンポポは2種類なので両種について調べることにする。

たんぽぽに飛びくらしたる小川かな 一茶

01 在来タンポポ

外来のタンポポとは異なり、花の下部を包む緑色の総苞片そうほうぺんはそり返らない。全国には20以上の種類があるが、ひとつの地域には3種類以上の混生はまず見られない。おおむね、北海道から関東北部まではエゾタンポポが多く、関東地方の内陸部はカントウタンポポ、関東から東海にかけての沿岸部はヒロハタンポポ(トウカイタンポポ)が多い。中部地方の太平洋側はセイタカタンポポが、近畿以西はカンサイタンポポが生える。四国や九州では白い花のシロバナタンポポの方が多しもある。北海道の海岸にはシコタンタンポポが生える。本州や北海道ではこれら以外の種類もいろいろある。

02 セイヨウタンポポ

総苞片そうほうぺんのうち、外側のものはそり返って下を向く。そう果は灰色がかかった褐色。沖縄を除く地域で、道ばたなどにふつうに見られる。花はほとんど一年中咲いている。ヨーロッパ原産の帰化植物。

セイヨウタンポポがはびこる理由

在来タンポポのほとんどは両性生殖で、ほかの株の花粉を受粉し結実する。一方、セイヨウタンポポは単為生殖なので、結実するのに受粉を必要としない。また、セイヨウタンポポの果実は軽く、遠くまで飛べる構造をしている。したがって、セイヨウタンポポは遠く離れた裸地に一人旅をし、そこで単独で種子の生産と散布を繰り返し、分布を広げることができるが、在来タンポポは集団でしか見られない。この繁殖力の差が分布の拡大につながっている。



在来タンポポ



在来タンポポ



セイヨウタンポポ



セイヨウタンポポ

03 アカミタンポポ

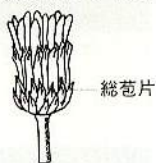
総苞片のうち、外側のものはそり返って下を向く。セイヨウタンポポによく似るが、その果はひと回り小さく、赤味がかった褐色をしている。都会などの乾燥した所に多い。ヨーロッパ原産の帰化植物。



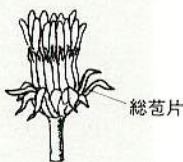
左:セイヨウタンポポ果実
右:アカミタンポポ果実

見分け方

総苞片はそり返らない.....在来タンポポ



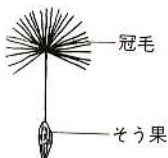
総苞片はそり返る



頭花

その果は灰褐色.....セイヨウタンポポ

その果は赤味を帯びる.....アカミタンポポ



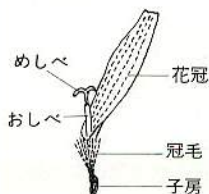
キク科の花

花は子孫を残すための大事な生殖器官で、その形態や発生のしくみを中心に植物の分類が行われる。

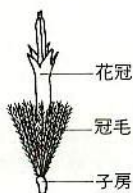
キク科の植物は小さい花がたくさん集まってできた頭花をつける。一つ一つの小さい花はその形から舌状花と管状花に分かれる。

タンポポの頭花は舌状花だけからなり、アザミの頭花は管状花だけからなる。また、ヒメジョオンは周辺部の舌状花と中心部の管状花からできている。

舌状花



管状花



《ヒメジョオン・ヘラバヒメジョオン・ハルシオン》

春から初夏にかけて花をつける。茎はまっすぐに伸び、下部は枝分かれしない。茎や葉を折るとヨモギに似たにおいがする。日当りのよい空地、道ばた、土手などに群がって生える。北海道、本州、四国、九州に分布。いずれも北アメリカ原産の帰化植物。

04 ヒメジョオン

高さ60cm～1mになる。茎を折ると中心に白色の髄が^髄つまっている。茎につく葉にはあらい切れ込みがあり、葉のつけ根は茎を抱かない。根元から直接出る葉(根生葉)には長い柄がある。茎や葉は黄緑色。つぼみは上を向く。花は5月末から6月にかけて咲くが、秋まで咲いているものもある。肥沃な場所に多く、繁殖力が旺盛で帰化植物の代表格。亜高山帯まで侵入するが自然地域に生えることはなく、山小屋周辺の裸地に群生する。



ヒメジョオン

05 ヘラバヒメジョオン

ヤナギバヒメジョオンともいう。ヒメジョオンに似るが、根生葉はへら状で、茎につく葉に切れ込みがなく、茎や葉は濃緑色なので区別できる。草地や土手などやせた乾燥地に多い。亜高山帯の草地の中にまで侵入する。



ヘラバヒメジョオン

06 ハルシオン

ハルジオン、ハルジオンともいう。茎は高さ60cm以下。茎を折ると、ヒメジョオン、ヘラバヒメジョオンと異なり中空になっている。根生葉は長い楕円形で、縁にはぎざぎざの鋸歯がある。茎につく葉のつけ根は茎を抱くような形をしている。つぼみはヒメジョオン、ヘラバヒメジョオンのように上を向かず、深くうなだれるように下を向く。花は4月ごろから咲く。空地、畑、道ばたなど肥沃な土地に多い。



ハルシオン

見分け方

茎は中空でない、つぼみは上を向く。茎につく葉は茎を抱かない



茎は中空でない



葉は茎を抱かない

茎につく葉に切れ込みがある ヒメジョオン



(ヒメジョオン) (ヘラバヒメジョオン)

茎につく葉に切れ込みがない ヘラバヒメジョオン

茎は中空、つぼみは下を向く。葉につく葉は茎を抱く



茎は中空



葉は茎を抱く

..... ハルシオン

帰化植物

帰化植物とは、本来日本に生育していなかった植物で、人間によって意識的または無意識のうちに日本に持ち込まれ、野生の状態では生育するようになったものをいう。

帰化植物は、土地の改変など人為の影響が強い地域に多く見られるが、在来植物によって釣り合いがとれている自然地域には少ない。このため、ある土地の植物の種類数に占める帰化植物の割合はその土地の改変(自然破壊)の指標となる。帰化植物は、大昔にイネと共に南方から入って

きたもの(夏に水田やその周辺に生えるタウコギやカヤツリクサなど)、稲作以降中国大陸を経由して入った各種作物に伴って侵入したもの(農耕地で春に開花し夏までに結実するミナグサやナズナなど)、明治以後の貿易の飛躍的拡大に伴い輸入貨物に紛れ込んで入ったもの(人為の加わった都市的な環境に生育するヒメムカシヨモギやセイタカアワダチソウなど)に大きく分かれる。

《ヒルガオ・コヒルガオ・セイヨウヒルガオ》

野原、道ばたなどどこにでも見られるつる性の草で、ほかのものにからみついて伸びる。葉の下部は左右に張り出す。花は初夏から夏に咲く。花は漏斗状で上向きに咲き、1日でしおれる。

昼顔の咲きのぼる木や野は広し 中村草田男

07 ヒルガオ・コヒルガオ

花はピンク色で、花のつけ根には2枚の大きな苞がある。葉の下部の張り出しはとがっている。道ばた、畑の周辺などに生える。

ヒルガオの葉は鉾形で、葉の下部の張り出しは下を向く。花は長さ5～6cm。北海道、本州、四国、九州に分布。コヒルガオの葉は三角形で、下部の張り出しは横を向く。花は長さ3～3.5cm。全国に分布。

08 セイヨウヒルガオ

葉はヒルガオに似るが、幅がより広く、葉先も丸味を帯びる。花のつけ根には、ヒルガオやコヒルガオのような大きな苞はない。花は白色または淡いピンク色。都市部の荒地に多く、鉄道の線路敷にもよく見られる。北海道、本州、四国、九州に分布。ヨーロッパ原産の帰化植物。



ヒルガオ

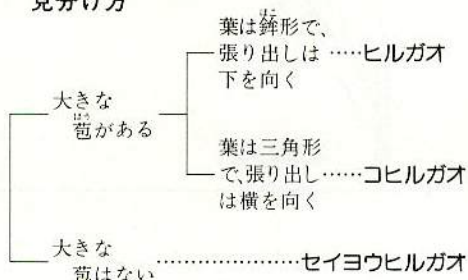


コヒルガオ

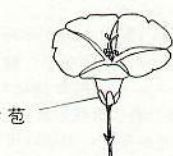


セイヨウヒルガオ

見分け方



(ヒルガオ・コヒルガオ)



(セイヨウヒルガオ)



(ヒルガオ)



(コヒルガオ)



(セイヨウヒルガオ)

《マツヨイグサ類》

花は夏から秋にかけて咲き、夕方から開いて朝にはしぼむ。花びらは4枚で、先はくぼむ。道ばた、空地、砂地などのやや乾燥したところに多い。いずれも北アメリカ原産の帰化植物。マツヨイグサ類には、調査対象となる3種類のほか、急激に減り大群落が見られなくなっているマツヨイグサ、瀬戸内海に多く見られるオニマツヨイグサなどがある。

09 アレチマツヨイグサ

メマツヨイグサともいう。茎はまっすぐ上に伸び、高さ1.2mくらい。やせ地では30～50cm。根元から出る根生葉は先端がとがる。茎につく葉は楕円形で鋸歯があり、葉の中央付近がもっとも幅広い。花は黄色。やや小形で直径3～4.5cm。都市や道ばたなどに多い。北海道、本州、四国、九州に分布。オニマツヨイグサはこれに似るが花が5～7cmで、茎につく葉に鋸歯がないので区別できる。

10 オオマツヨイグサ

アレチマツヨイグサに似るが、ひと回り大形。茎はまっすぐ伸び、高さ1.5mに達することがある。根生葉は先が丸味を帯び、とがらない。根生葉の葉面は強く凹凸する。茎につく葉は長い卵形で、中央より下の部分の幅が広がる。花は黄色で大きく、直径7cm以上。海岸の砂地や河原、内陸のやせた土地などに生える。北海道、本州、四国、九州に分布。オニマツヨイグサは根生葉の葉面に凹凸はなく、上から見ると花びらの間にすき間ができるので区別できる。

11 コマツヨイグサ

茎は根元近くで枝分かれして地面を這うか、斜めに伸びる。茎につく葉には、大きな切れ込みがある。花は淡い黄色で直径2～3cm。北海道、本州、四国、九州に分布。



アレチマツヨイグサ



オオマツヨイグサ



コマツヨイグサ

見分け方

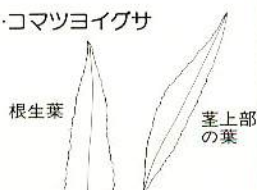
- 茎はまっすぐ上に伸びる
- 茎につく葉の幅は中央部が最も広い。根生葉は先がとがる。花は直径3～4.5cm
.....アレチマツヨイグサ
 - 茎につく葉の幅は中央より下の方が広い。根生葉はとがらない。花は直径7cm以上
.....オオマツヨイグサ
- 茎は根元近くで枝分かれする。茎につく葉には大きな切れ込みがある。花は直径2～3cm
.....コマツヨイグサ



(コマツヨイグサ)



(オオマツヨイグサ)



(アレチマツヨイグサ)

《センダングサ類》

高さ50cm～1.5m。茎の断面は四角。花は晩秋に咲く。果実は先が角状で、下向きのとげがある。センダングサ類には、調査対象の2種類のほか、コバノセンダングサ、シロノセンダングサ、アメリカセンダングサ、コセンダングサ、タウコギなどがある。

12 センダングサ

舌状花は2～3個で黄色。舌状の部分は長さ5mm。葉は数個から十数個の小葉に分かれる。道ばた、空地などに生えるが、大群落をつくることは少ない。本州、四国、九州、沖縄に分布。似た種類に小葉が深く切れ込むコバノセンダングサがある。



センダングサ

13 タチアワユキセンダングサ

オオバナセンダングサともいう。センダングサに似るが、舌状花は5～7個で白色。舌状の部分は長さ1.5cmくらいで、幅が広い。道ばた、畑、空地などに多い。沖縄に多く見られるが、日本の西南部にもところどころに分布する。熱帯地方原産の帰化植物。

シロノセンダングサはこれによく似るが、花が少し小形で舌状の部分の長さは7mm～1cmと短いので区別できる。本州、四国、九州に分布。



タチアワユキセンダングサ

見分け方

明らかな舌状花がある

舌状花は黄色



(センダングサ)



(コバノセンダングサ)

小葉は深く切れ込まない……………センダングサ

小葉は深く切れ込む……………コバノセンダングサ

舌状花は白色

舌状部分の長さは1.5cmくらい……………タチアワユキセンダングサ

舌状部分の長さは1cm以下……………シロノセンダングサ

舌状花



舌状部分の長さ

舌状花はあるが、小さくて目立たない。茎は暗紫色……………アメリカセンダングサ (セイタカタウコギ)

舌状花はない……………コセンダングサ・タウコギ

《ミミナグサ類》

茎は花の咲く時は10cmくらいで、花が終わると30cmにまで伸びる。茎は根元近くで枝分かれする。全体に毛が密に生える。畑、道ばた、庭などの肥沃でやわらかい所に生える。ミミナグサ類には、調査対象の2種類のほか、タカデソウやオオバナノミミナグサなどがある。

14 ミミナグサ

茎の色は紫色を帯びる。葉は濃い緑色。果実が大きく、果柄は萼の長さのほぼ2倍。全国に分布。

東北地方と北海道の海岸の岩場には、ミミナグサに似るが、花の大きなオオバナノミミナグサがある。花びらの長さはミミナグサで4~5mm、オオバナノミミナグサで12mm。

15 オランダミミナグサ

ミミナグサによく似るが、茎は緑色。葉は黄色味がかかった明るい緑色。果実はミミナグサより小さい。果柄は萼よりも短い。全国に分布。ヨーロッパ原産の帰化植物。オランダミミナグサは都市部のような環境に適応しやすく、都市部ではミミナグサよりも多くなっている。



ミミナグサ



オランダミミナグサ

見分け方

茎は紫色を帯びる。果柄は萼の長さの2倍



..... ミミナグサ

茎は緑色。果柄は萼よりも短い

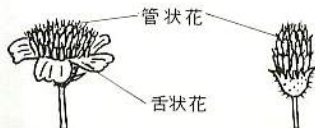


..... オランダミミナグサ

センダングサ類の頭花

シロノセンダングサ

頭花は舌状花と管状花からなる



コセンダングサ

頭花は管状花だけからなる

16 セイタカアワダチソウ

茎はまっすぐ上に伸び、高さは1～2.5mに達する。茎には毛があってざらつく。葉は厚く、表面に短い毛があってざらざらする。葉の縁には浅い鋸歯があり、下方に曲がる傾向がある。花は秋に咲く。たくさんの黄色い花が円錐形に集まってつくのでよく目立つ。河原、土手、埋立地などに大群落をつくる。全国に分布。花はミツバチの蜜源となる。北アメリカ原産の帰化植物。

カナダアキノキリンソウはこれによく似ているが、葉が薄く、あまりざらつかない。また、葉の縁が下方に曲がらないことと花が夏に咲くことでも区別できる。オオアワダチソウは茎に毛がなく、白色を帯びる。また、葉は薄く、ざらつかない。花は夏に咲く。アワダチソウというのはアキノキリンソウのことで在来の植物。



セイタカアワダチソウ

17 オオバタクサ

きわめて大形の草で、3mに達するものもある。茎は枝分かれする。葉は3～5ヶ所深く切れ込み、長さは15～30cm。花は緑色で夏に咲き、茎の先につく。河川の下流域などの湿った肥沃なところや窒素分の多いゴミ捨て場などにアレチウリと共に群落をつくる。全国に分布。北アメリカ原産の戦後の帰化植物。クワモドキともいう。

明治時代に帰化した同じ仲間のバタクサはこれよりずっと小さく、ふつうは1mくらいにしかならない。また、葉が羽のように細かく切れ込むので区別できる。



オオバタクサ

18 アレチウリ

長さ5m以上になるつる草で、ほかの木や草にらせん状の巻きひげでからみつく。茎や葉柄には長い毛が多い。葉は手のひら状に切れ込む。花は夏から秋にかけて咲く。直径約1cmで、黄緑色の5枚の花びらからなる。果実は長さ1.2cmくらいの長い卵形で、長いとげが生え、ふつう5～8個集まってつく。果実の中には種子が1個入っている。汚濁の進んだ河川の河原、土手など肥沃で湿っぽいところやゴミ捨て場付近に多く見られる。北海道、本州、四国、九州に分布。北アメリカ原産の帰化植物。



アレチウリ

19 ヤブガラシ

長さ5m以上になるつる草で、ほかの木や草にらせん状の巻きひげでからみつく。茎は筋ばっている。若い茎は赤褐色を帯びる。葉は鳥の足状で、5枚の小葉からなる。小葉の長さは5～10cm。花は夏に咲く。花びらは緑色で4枚。午前中に開き、午後には落ちる。花の内側はオレンジ色をしている。庭や道ばたなどに生える。北海道の南部以南に分布。



ヤブガラシ

20 ムラサキカタバミ

葉は地中の鱗茎から直接出る根生葉で、長い柄がある。葉は3枚の小葉からなり、小葉の先はへこむ。花は春から夏にかけて咲く。花のつく茎は高さ15～30cm。花びらは5枚で濃いピンク色をしている。畑、道ばたなどに生える。シュウ酸を含み、かむとすっぱい味がする。寒さに強く冬でも枯れない。関東地方以南に分布。南アフリカ原産の帰化植物。

この仲間には、黄色の花をつけるカタバミ、白い花をつけるミヤマカタバミなどがある。



ムラサキカタバミ

21 キキョウ

高さ30cm～1m。茎と葉の下面は白っぽい色をしている。葉は卵形や楕円形で、長さ4～7cm。花は釣鐘状で夏に咲き、茎の先につく。花は青紫色で横向きに咲く。つぼみがふくらみ、おしべが成熟すると花先が五裂して美しい花となって開く。乾いた草地に生える。北海道、本州、四国、九州に分布。庭に植えられることも多い。同じキキョウ科のホタルブクロやツリガネニンジン花は下に垂れて咲く。リンドウは花が上向きに咲き、長い筒状をしている。

きりきりしゃんとしてさく 梧棲かな 一茶



キキョウ

22 オミナエシ

高さ40cm～1mになる。葉は細かく切れ込む。夏から秋にかけて茎の上部に枝を生じ、黄色い花が上を向いて点々とつく。花の一つ一つはそれほど美しくはないが、全体として風にそよぐさまが美しい。やや乾いた草地などにススキと共に生えることが多い。茎や葉が乾くと臭いにおいを出す。全国に広く分布する。オトコエシはこれに似るが、花は白色である。

おんなよし 女郎花の中に休らふ、峠かな 高浜虚子



オミナエシ

秋の七草

秋の野に 咲きたる花を 指折り
かき数ふれば 七くさの花
萩が花 尾花葛花 などでしこの花
をみなえし また藤袴 朝顔の花
(万葉集)

今からおよそ1,300年程前に、歌人、山上徳良は秋の野に咲く花をこのように歌に詠んだ。ハギ、ススキ(尾花)、クズ、ナデシコ、オミナエシ、フジバカマ、キキョウ(朝顔)。この7種類の植物を「秋の七草」という。万葉集の時代にはキ

キョウのことを朝顔と呼んだ。「緑の国勢調査」では、昔から親しまれてきた身近な草花である秋の七草のうち、オミナエシとキキョウを調査対象にしている。

「春の七草」は、せり、なずな、おぎょう(ハハコグサ)、はこべら(ハコベ)、ほとけのざ(コオニタビラコ)、すずな(カブ)、すずしろ(ダイコン)のことをいう。いずれも食べられる草で、正月の7日に無病息災を願って食べる「七草粥」は平安時代初期に始まった習慣。

23 テッポウユリ

茎は長さ40cm～1mで毛はない。葉は細長く、長さ10～20cm、幅5mm～1.5cm。濃緑色で光沢がある。花は春から初夏に咲き、茎の先に1～数個つく。花は白色で、横向きに咲く。九州の屋久島以南に分布し、海岸近くの崖や草地に生える。婚礼、葬式、イースター用の切り花とするため、世界中で栽培されている。日本からは鱗茎が輸出されている。テッポウユリに似て葉の細い中国原産のリーガルリリーが最近本州などに帰化している。



テッポウユリ

24 ニリンソウ

高さ15～30cm。葉は根元から出て、長い柄がある。葉は深く切れ込む。葉脈は白っぽく、目立つ。花は春に上向きに咲く。花のつく茎は直立し、3枚の葉をつける。二輪咲くことが多いが、一輪のことも三輪以上咲くこともある。つぼみの外面は紅色を帯びる。花が終ると間もなく枯れ、夏には姿を消す。肥沃でやや湿った林の下に群生する。北海道、本州、四国、九州に分布。フクベラともいう。イチリンソウなどの似た種類には花の下の葉に明らかな柄があるので、柄のないニリンソウとは容易に区別できる。

森の奥に日ざしうつらふ二輪草 奥田とみ子



ニリンソウ

25 チゴユリ

茎は高さ20～35cmで枝分かれしない。葉は楕円形で長さ4～7cm。葉の縁には鋸歯がなく、やや波状にうねる。葉柄は短く、茎につく部分は紫色を帯びる。花は白色で春から初夏にかけて咲く。長さ1.2～1.6cm。茎の先に1～2個つき、斜め下向きに咲く。果実は球形で黒色。林の下に生える。北海道、本州、四国、九州に広く分布。比較的似たオオチゴユリは花が緑色で、茎は枝分かれする。また、キバナチゴユリは花が淡黄色。ハウチャクソウはチゴユリより日陰に生え、花が筒状で下向きに咲く。



チゴユリ

26 カタクリ

花の咲く株は葉が2枚、咲かない株では1枚で、いずれも根元から直接出る。葉は卵形か楕円形で長い柄がある。葉の表面には紫色の斑紋がある。紅紫色の花が早春に茎の先に1つだけ咲く。まだ葉の茂らない落葉広葉樹の林床であわただしく光合成をして、林床まで光が届かなくなる頃には、地上部は枯れて休眠に入る。北海道、本州、四国、九州に分布するが、西日本では山中に生育。

片栗の一つの花の花盛り 高野素十



カタクリ

27 ホテイアオイ

葉柄の中央部がふくらんで浮袋状になり、水に浮く。葉は濃緑色で光沢がある。葉の長さは4～20cm。養分に富む所では1m以上になることもある。淡紫色の花が夏から秋に咲く。花は1日だけ開き、翌日には茎ごと曲がって水中に沈む。関東地方以南の池沼や川に生える。水面を覆いつくすほどに繁殖するので害草となる。ホテイソウともいい、観賞用として池や水槽で栽培される。南アメリカ原産の帰化植物。



ホテイアオイ

28 エビモ

水底に根をおろし、茎葉は水中にたなびく。茎は長さ30cm～3m。葉は細長く、長さ3.5～6cm、幅6～7mm。葉の縁は大きく波打ち、はっきりとした鋸歯がある。花は水面に浮いて咲く。池沼やゆるい流れなどに生える。北海道、本州、四国、九州に広く分布。同じヒルムシロ科の水草は種類が多いが、エビモは葉の縁が波打ち、ぎざぎざの鋸歯があるので区別できる。



エビモ

29 タヌキモ類

水生の食虫植物。水中に浮くものと水底に定着するものがある。葉は細かく線形に裂け、捕虫袋をつける。花は夏に咲く。花のつく茎は水面上に出て、黄色の花を横向きにつける。花は唇形で上下2弁があり、下の弁は大きく横に広がる。9種類ほどあり、北海道、本州、四国、九州の池沼に生える。そのうち、主に低地にはタヌキモとノタヌキモが、山地にはコタヌキモとヒメタヌキモが生える。



タヌキモ類

食虫植物

虫を捕えて養分を吸収する植物を「食虫植物」という。食虫植物にはタヌキモ類のほか、ミミカキグサ、ムジナモ、モウセンゴケ、ムシトリミレなどがある。これらはいずれも湿地や泥炭地など湿気があるやせた土地などに生育しており、不足しがちな養分を捕えた虫から補ってい

る。虫を捕えるしくみはさまざまで、タヌキモ類やミミカキグサは弁のついた捕虫袋をもち、ムジナモは二枚葉のように閉じる葉をもち、モウセンゴケやムシトリミレは葉の表面の腺毛から出す粘液で虫をつかまえた後に葉で包み込む。

30 コウホネ類

葉は地下茎から出て、水面に浮くか水面上に出る。水中には別の形の水中葉がある。葉は長い卵形で長さ20~30cm。濃緑色で光沢がある。花は夏に咲き、水面に浮くか水面上に出て上を向く。花びら状の萼びらは黄色で、多数のおしべがある。池や小川に生える。コウホネは九州以北に、ネムロコウホネは本州北部と北海道に分布する。このほかに、ヒメコウホネ、オゼコウホネ、オグラコウホネがある。

河骨カボネのたかきタカキ萼ヒラをあげにけり 富安風生



コウホネ類

生物の学名

生物の名前は、国により、また、地域により異なる。生物学の分野では、学術上の混乱を避けるため、こうした生物の名前を統一する必要がある。このため、スウェーデンの生物学者リンネの考案した「二名式命名法」が現在広く用いられている。この方法で生物の種ごとにつけられる名前が「学名」で、人であれば姓にあたる属名と名にあたる種小名の二つをラテン語で表す。

例えば、セイヨウタンポポの学名は *Taraxacum officinale* である。属名の *Taraxacum* は、*taraxis* (不安) と *acemai* (治療する) の合成語である。また、種小名の *officinale* は「薬効のある」という意味で、胃ぐすりとして用いられたことからつけられた。

一方、日本語での生物名の標準化も行われ、「標準和名」として統一されている。

植物の名前の由来

植物の名前にはいろいろな由来がある。その由来を知ることによって、その植物に親しみがわく。植物の特徴からとった名前が最も多く、調査対象の植物では、花が昼に咲くのでヒルガオ、同じく夕方から朝にかけて咲くのでマツヨイグサ(待宵草)、花の時期が春なのでハルシオン、花が2個つくとでニリンソウ(二輪草)、葉がネズミの耳に似ているのでミミナグサ(耳草)、葉が食べられたように欠けているのでカタバミ(傍食)、花の姿がやさしく女性的なのでオミナエシ(女郎花)、花がラッパ銃ラッパに似ているのでテッポウユリ、葉柄がほてい様のお腹のようにふくらんでいるのでホテイアオイ、葉がタヌキの

尾に似ているのでタヌキモ、水底にある地下茎が白い骨に似ているのでコウホネ(河骨)などがそれにあたる。

このほか、やぶを覆って枯らしてしまうのでヤブガラシ、原産地の名前をとってセイヨウタンポポなどがある。

また、タンポポには、実のつく形が綿を布で丸く包んだ「たんぼ」に似ているので「たんぼ穂」から来たとする説と花茎を切り取り両端に切れ込みを入れて水につけると鼓つづみの形になることから鼓を打つ音「タン、ポンポン」を由来とする説がある。

この手引書は環境庁自然保護局が作成したものです。作成にあたっては次の先生方の指導と協力を得ました。

朝比奈正二郎・岩野泰三・大場達之・千石正一
武田正倫・塚本洋三・林 公義・林 正美

使用した写真、イラストの提供者と図版を転載した図鑑は次のとおりです。

(写 真) 今井初太郎・大場達之・小林敏男・楚山 勇
高橋秀男・武田正倫・塚越 香・中静 透
中村守純・広瀬 誠・宮城康一・武蔵暁生

(イラスト) 大場達之・金子与止男

(図 版) 保育社「原色日本昆虫図鑑(下)」
保育社「原色日本哺乳類図鑑」
家の光協会「原色両生・爬虫類」
日本野鳥の会「フィールドガイド・日本の野鳥」
日本野鳥の会「山野の鳥」

調査のてびき (第3回録の国勢調査)

昭和59年2月

環境庁自然保護局企画調整課自然環境調査室
〒100 東京都千代田区霞が関1-2-2
電話 03-591-3228

